

しなやかな 残響 1

— 春を紡ぐ者の叙事詩 —

カトマール王都落城 編

〈全3巻〉

比名たかし Studio Ki-Rop!

目次

プロローグ

第一章 受難

その一 闇のダンジョン

その二 城下町

その三 横暴なトロール

第二章 王都カトマール

その一 出頭命令

その二 結婚



サンプル版

プロローグ

「チャラリヨウ博士。今夜も書庫に籠っておいでか」

年老いた男が語りかけている先には、少女が一人、重そうな木の机にしがみつくように座っていた。小さな手に大きな羽ペンを持ち、時折、ひらりひらりと動かしている。

「古代史の編纂作業が滞っているのよ。頭の固い役人どもがせっせと積み上げるくだらない仕事のせいでね」

少女は大人びた口調で答えた。山積みにした書物の谷間、書架灯の柔らかな光の中、おかつぱ頭の髪が黄金色に輝く。耳の先が尖り、瞳の色は遠目にも鮮やかな緑。エルフ族だ。幼い見た目に不釣り合いな宮廷官吏のローブを身にまとっている。実年齢は相当に上なのだろう。

「古代史ですか。私のような学のない見回り番には縁のない世界ですな」

「あら、そうとも言い切れないわ。過去と現在、そして、未来は常に繋がっているの。鎖のようね。わたしやあなただって、その鎖から逃れることはできないのよ。城の役人どもがおとぎ話だと思っっている古代の物質文明だって実在したのよ。ちゃんと見てきた人だっているんだから」

エルフは、男の顔に浮かんだ笑みを見て、少し口ごもった。城の役人が見せるお世辞交じりの冷笑ではなく、純朴で他意の無い老人の笑顔が新鮮に感じられたのだ。



「もちろん、まだ確かめたわけじゃないわよ。見た人がいるっていうのは、わたしの母の伝え話なの。今は姿を隠している不死の一族のこと。だから、古文書の山の中から記録の断片をひとつひとつ繋ぎ合わせる検証作業が必要なの。」

今からおよそ三万年前に存在した古代文明では、人々の生活は今よりずっと便利で、荘厳で美

しい城郭や空中楼閣に住んでいたと考えられるの。

そんな繁栄を誇った古代文明はこつぜんと地上から姿を消した。自然や精神よりも物質に価値の源を置き、繁栄の代償として生じた暗黒の力によって。傷跡としておびただしい数の魔物と魔法を残して」

「高名な宮廷博士のお話ですので、私のような者には難しい事は分かりませぬが。なにやら心に響くものがあります。この歳で心躍るなどと言ったら笑われるでしょうけど」

「笑わないわよ。わたしは、宮廷の頭の固い役人相手の論文じゃなくて、路傍の吟遊詩人に語り継がれるような生きた言葉にしたいの。これは、叙事詩。不完全な記録の断片をつなぎ合わせるのは気が遠くなる膨大な作業だけど。まずは、手短なところから始めるつもりよ。そう、多くの人々の記憶にも残っているあの事件。あなたがまだ若い頃に起こったラトザール全土を巻き込んだ魔王復活をくわだてた反乱にも物質文明の暗黒の力の残滓が関わっていたとわたしは考えているわ」

エルフの少女は、羽ペンを握り直し、机の上の白い紙に文字を連ね始めた。

『最も強力な魔法、それは、人の心を動かす魔法』

春を紡ぐ者の叙事詩

窓の無い石造りの部屋の床の上に純白のドレスを着た少女が座っている。壁で揺らめく灯は、一見、蝋燭のように見えるが、宙に浮いているため、魔法の力で作られた物だと分かる。その灯によって石の壁面に象形文字のような紋様が形を変えながら映し出されていた。

寂寞とした冷たい石牢のような場所には似つかわしくない可憐な少女。あるいは、その姿をした者は銀色の長い髪を床に這わせ、背筋を真っ直ぐ伸ばしている。空のような淡い青の瞳、透き通るような白い肌と愛らしい顔立ちは、妖精のようにも見える。彼女は、同じ床の上に仰向けに倒れた青年の頭を膝に乗せて抱いていた。青年の息遣いときまよう視線、そして、見るも無残な傷と石の床を赤く染めゆく鮮血は、今まさに彼の命の灯が消えようとしていることを物語っている。

死にゆく者を抱きながら、妖精のような少女には取り乱している様子は無い。それどころか、まるで子守唄のような旋律を口ずさんでいる。有限の時間を持つ命を愛しむかのように。
「おやすみなさい。愛しの子。安らかなる良い夢を。そして、また大切な人に巡り合えますように」



サンプル版

五年後

長閑な景色が広がる山あいの村はずれ、長い黒髪をポニーテールに束ね健康的に日焼けした肌の幼い女の子が棒きれを振り上げて、男の子たちを追いかけて回っていた。男の子たちははやし立てたり、悲鳴をあげたりしながら逃げ回わる。

「カレン、夕方にはお客様がいらっしやるのよ。そろそろ戻ってらっしゃい」
往来で女が呼んでいる。

「ママー」

女の子が棒きれを持ったまま彼女の懷に飛び込んで、無邪気な笑顔を見せた。女の子の母親は、舞った土埃に目をしばたいた。

「お客様って誰？」

「お父様のお知り合いよ」

「お父様って？」

女の子は、父親に会ったことがない。広場近くのお墓の中にいるらしくて、母親が毎日その石の前で手を合わせて呼び掛けている。

そんな石のお知り合い？　女の子は首を傾げた。

「あなたの亡くなったお父様の育ての親にあたるお方がいらっしゃるの。とっても偉いお方よ。さあ、おうちに帰って、お着換え。その前に顔を洗わなくちゃ。泥だらけよ」

灯ともし頃、訪問者は、村の広場に馬車で到着した。綺麗な金色の文様に縁取られた黒光りする馬車から降りてきたのは、透き通るような白い肌に白いドレスを着た妖精のような姿の少女だった。銀色の長い髪は膝下まで届き、歩みに合わせ光を受け優雅に揺れている。両腕に色鮮やかな赤いバラの花束を抱えていた。

「お人形さんが歩いている？」

女の子は、あんぐり開いた口を手で押さえ、丸くした目をパチクリさせた。

純白の少女の後から、栗色の巻き毛の少年が馬車を降りた。黒と白の礼装をまとい金色に光る紋章を付けている。

「まあ、エリザベス様。今日は、ハートン卿までご一緒で」
出迎えたカレンの母が驚いた様子で膝まづかんばかりに腰を低くし、妖精のような少女の手をとった。歳下の少女に接する態度ではなく高貴な年配者に対する態度だ。



サンプル版

「お兄さまは、滅多に人前に出たがらないんだけど、今日は特別な日だから、無理を言っ
てきて頂いたの」

少女はそう言った。

「魔王アーサーの討伐を無事終えられたばかりでお忙しいところ、時の人がお揃いで、よく、こ
んな田舎村まで」

「ええ、五年もかかってしまったけど、ようやく終わったわ。なにもかも。それに今日は、勇者カ
ルザックⅡダルクの命日ですもの。……この子が？」

少女は、ポニーテールの女の子に視線を止めた。

「はい。ダルクの忘れ形見。カレンです」

「あの子にそっくり。特に目鼻立ちと髪が。バラ色の頬と口元は、エレン、あなた似ね。大きくな
ったら、べっぴんさんになるわ。ねえ、お兄さま」

呼び掛けられた少年の姿をした者は、後ろで微かに頷いて見せた。

「わんぱくで困ってますの。女の子なのに」

「わたし、べっぴんさんじゃなくて、冒険者になるの。冒険者になって、悪い魔王を倒すの」
唐突なカレンの言葉に、その母エレンは、苦笑した。

「すみません。まだ子供なもので」

エレンは、そう言って、カレンの前にかがみ込んだ。

「魔王はもういないのよ。カレン。ここにいるハートン卿が倒して下さったの」

カレンは、きよとんとして、人形のような姿の少女と栗色の巻き毛の少年の顔を交互に見ている。

「お姉さんとお兄さんは、冒険者なの？」

「いいえ、違うわ。カレン」

少女の姿をした者は、小さなカレンの前で膝を折った。

「わたしたちは、思い出の番人。美しい思い出を集めることがわたしたち一族の役目。カレン、あなたも、思い出のうちのひとつなのよ。とびつきり美しくて、わたしのお気に入りのお思い出。

お兄さまは、この先あなたに酷い苦難が待ち受けているって言うの。だから、あなたに会っておきたかったの。わたしは嫌よ。カルザックの娘が苦しむなんて。でも、それが運命なら、あなたはたくさんの人と出会って、困難をひとつひとつ乗り越えて行くことでしょう。そして、またわたしと出会うの。

あなたにはカルザックの加護が付いている。あの子の最期の言葉は、カレンあなたを守る、だったわたしは、それをあなたに伝えに来たの」

少女の姿をした者が奏でるような言葉を聞きながら、隣で、母が泣いているのをカレンは不思議

議そんな顔で見ていた。

幼いカレンには、母の涙のわけも、妖精のような少女の言葉も全く理解出来なかった。幼い頃のその不思議な出来事は彼女の潜在意識の中に埋もれ、記憶として残ることはなかったのだ。そして、十数年の月日が流れた。

第一章 受難 その一 闇のダンジョン

振り返ると闇の中に、まだ魔物の追手が潜んでいるような気がする。カレンは残り少ない魔力を細い指先に集中させるため、そっと目を閉じた。歯が小刻みにふれ合い、耳障りな音をたてている。“LIGHT……”震えの止まらない唇から、ようやく呪文を絞り出すと、柔らかな魔法の光が暗い洞窟の中を照らし出した。

冷たく静まりかえった洞窟の中には、すでに魔物の気配はない。足元の水の流れが、深い闇へと続いている。自分がどこにいるのか分からない。仲間たちとは完全にはぐれてしまったらしい。

「……」

カレンは、安堵と絶望にため息を漏らし、彼女の体を包む光の輪を見つめた。

初めて呪文を習い魔法を使えた時のことを思い出す。あの時は、夜も眠れないほど興奮した。三年前彼女が王都カトモールで冒険者の修業を始めた時のことだ。体の中に湧き上がる未知なる力を感じた。自分の体が自分の物ではないように思えた。何か底知れぬ大きな力に動かされているような感覚に襲われながら、手のひらの上で揺らめく淡い暖かな光を飽くことなく見ていた。その光は大地から沸き出した物のように思えた。

その呪文もLIGHTだった。冒険者なら誰でも使える初歩的な魔法だ。魔物を倒すわけでも傷ついた体を癒すわけでもない。ただ暗闇から逃れるためだけの光に過ぎなかったが、今の彼女に

は何よりも必要な物に思えた。

ほんの数日前のこと、サルテラ山塊の麓の村で魔物の姿が目撃されるという騒ぎが起った。幸いにして村人に被害はなかったが、見過ごすことはできない。さっそく魔物の動きを封じるために冒険者が雇われた。それがカレンと五人の気の合った仲間たちだった。

冒険者としては無名と言ってもいい彼らを選ばれたのは、村に高名な冒険者を雇うだけの資金がなかったからだろう。また、目撃情報から判断して、今回はコボルトなどの地上に這い出すことのできる低級魔物が相手と考えられていた。

仲間たちの中で、カレンは最も年少で経験も浅かった。そして、これが彼女の初めての冒険だった。そのため、カレンは魔法や薬によって仲間たちの戦闘を後方から支援する役割を任された。

仲間たちは、彼女に、ついて歩いてさえいればいいと言った。

笑顔で彼女の肩を叩きながら、山裾に空ろな口を開ける洞窟の闇の中に鼻歌交じりで足を踏み入れた者たち。つい数時間前のことだ。

それがどうしてこんなことになってしまったのだろう。

わたしはどうしてこんなところにいるのか。カレンは頭を振った。長い黒髪が肩の上を哀しいまでに美しくしなやかに揺れる。

若い彼らは、どんな状況でも油断は禁物だという鉄則を忘れていたのだ。そして、入口付近の弱い魔物どもをあっさりと蹴散らしたところで罠に掛かった。侵入者を撃退するための防御結界だ。

床に巧妙に仕掛けられたその罟は彼女たちを洞窟の奥深くへと送りこんでしまったらしい。たちまち、恐ろしい見たこともない魔物の一群が、耳まで裂けた口から火を吹きながら、哀れな冒険者たちを襲った。

最前列で闘っていた三人の戦士が次々と傷つき倒れても、未熟なカレンにはどうすることもできなかった。どこを、どう、走ったのか、歩いたのか、分からない。今こうして魔物たちから逃れ得たことが奇跡的なことのように思われる。仲間たちの断末魔の叫びが耳の奥でこだまする。カレンは、顔を覆い、その場にしゃがみ込んだ。

不思議と涙は出ない、ただ、こらえようのない吐き気が胸の奥からこみ上げてきた。彼女の胸が、防具に締め付けられ波打っているようだ。動悸がおさまらない。彼女は、防具を紐解いて、大きく息をついた。

その防具は特殊な金属で出来ていた。軽く、機敏性を犠牲にすることなく、非力な者でも着こなすことができた。氷の鎖帷子と呼ばれている。それは、偉大な冒険者だった彼女の父親の形見だった。

冒険者の仕事は、地中深くに潜む魔物たちと戦うことだ。時には財宝を奪い返したりすることもある。冒険者がいなければ、魔物たちは地上に出て無抵抗な人々を襲ってしまうだろう。そのため、この国では冒険者は最も尊敬される職業だ。それは、死を賭して集める尊敬なのだ。

魔族の中には高い知能を持つものも多く、魔の領域を侵されることを嫌い、洞窟を掘り、仕掛け

扉や死の罫で冒険者の行く手を阻む。それでも、冒険者を志す若者は後を絶たない。名誉のため。守るべきものを守るため。

父親の跡を継いで冒険者になりたいという娘の意志が曲げられないことを知った母親は、ふた月半をかけて、娘のために父親の形見の寸法を取り直した。そして、国中のどんな武器屋でも手に入らないような素晴らしい防具に仕上げてくれた。魔法の力を宿すその防具は火の攻撃から身を守ってくれる。彼女が、魔物の攻撃から逃げることでできたのは、そのためだったに違いない。防具を弛めると、ようやく呼吸が落ち着いてきた。カレンは、冷静に状況を判断するよう努めた。

見覚えの無い岩肌が続いている。足元の水の流れは氷のように冷たい。氷の鎖帷子によって守られていた肌には、あのすさまじい炎の中をかいくぐりながらも火傷の跡さえない。

LIGHTの魔法は、若干の発熱作用を伴うため寒さは感じられない。携帯の食料、薬を搜したが、見あたらない。

LIGHTの魔法の効果もそのうち消えてしまうだろう。

もう彼女には次の魔法を使えるだけの力は残っていないかった。冷たい暗闇の中で一人ぼっちで死ぬのは嫌だと思った。

冒険者にとって一番大切なこと、それは、どんな状況の下でも決して希望を捨てないことだ。彼

女がカトマールで修行を積んでいたときの師匠の言葉だ。

ほとんど絶望的な脱出の可能性について、彼女は考えを巡らした。このまま、動かずに助けを待つか、自力で脱出するか。再び魔物が出現したら……

カレンは、いつしか水の流れの上流に向かって歩きはじめた。地上に向かって……、自ら信じる方向へと。

次第に、水の流れは急になる。彼女の胸に微かな希望の光が芽生えた。急勾配の登りの中で、いつしか呼吸の乱れも忘れていた。

大きなホールに出た。天井が見えない。カレンは、目の前に立ちはだかった滝に歩みを止めた。

地中の滝だった。深い暗闇の中から滝は一直線に流れ落ちていく。ホールの中は水煙に霞んでいる。行き止まりだ。哀れな若者の胸を再び絶望が支配しはじめた。細い肩を落として、しばらく呆然と立ちすくむ。

引き返すしかない……、背後に獣の低いうなり声を聞いたのは、その時だった。

彼女は、反射的に右に飛んだ。左手に取り直した盾を獣の毛むくじやらのぶ厚い腕がかすめた。鋭い爪が暗闇の中で不気味に光る。ワーベアだ、悪の力に身を染めた狂気の熊男であり、洞窟の闇にさまよい込んだ冒険者のなれの果てだとも考えられている。

カレンは、反撃に移った。背後は壁であり、逃げ場はない。しかし、硬い針金のような獣毛に覆わ

れた皮膚を、彼女の貧弱な武器はかすることさえできなかった。

ワーベアの第二の攻撃は、カレンの盾を払い飛ばした。そして、立て続けに大きな鋭い爪がカレンの体を襲い、彼女の左脇腹をえぐった。ほとんど致命傷だ。カレンは、直感的に死を覚悟した。傷みは感じない。

彼女は、坤身の力を振り絞り、熊男の懷に飛び込んだ。しかし、彼女の最後の攻撃も効を奏することはなかった。カレンは、その場にぐずれ折れ、勝ち誇ったワーベアは、この美味しそうな獲物にとどめを射すため腕を振り上げた。

闇を切り裂くような爪を目の前にしても、カレンには恐怖はなかった。

ただ、こんな場所でこんな形で死んでゆく自分自身が無性に腹立たしく思えた。

その時、信じられない光景がカレンの視界に展開された。ワーベアの太い腕が根元から切り落とされて、宙を舞っている。ワーベアは、断末魔の叫びをあげる間もなく、地響きと共に倒れた。その獣はすでに死んでいた。

人影がカレンの目に映った。彼女よりも年下にしか見えないような少年の姿だ。黒いマントにすっぽりと身を包み、獣の死体の後ろからカレンを見おろしている。手にした剣身は妙に透き通った輝きを放っている。その剣を鞘に納める時、マントの下にロードの記章が見とめられた。ロードは、特に優れた冒険者にのみ許される称号である。

「ルーイ、どんな様子？」

もうひとつの人影が闇の中から現れ、つい先ほどカレンを救ったロードに呼びかけた。

「ひどい怪我だよ。すぐに、手当をしなくちゃ。エド、手伝って」

“手当”という言葉に初めて、カレンは、身を切り裂くような激痛を覚え、意識を失いかけた。

「大丈夫、すぐに良くなるからね」

ルーイと呼ばれた少年は、優しくカレンに語りかけながら、彼女の身につけている物を脱がせた。カレンの受けた傷は内臓にまで達していた。断続的に鮮血が吹きこぼれている。ルーイは、その傷の上に両手を組み合わせた。“MACURE”呪文を口にして、傷を撫でまわした。

「よかった。きれいな体に傷が残らなくて」

撫でまわされているカレンの体からはすでに跡形もなく傷が消えていた。

「しばらくは痛みが残るけど、やがて消えるはずだよ。内臓の治療には時間がかかるんだ。間に合ってよかった。ぼくを呼んだのは君だね」

すでにカレンの体は半身を起こせる程に回復していた。“呼んだ覚えはないけど……” 彼女はもうろうとした意識の中で、視線をさまよわせながら、そう考えていた。

若いロードは頭をすっぱり覆っていたフードを彼女の目の前で外した。プラチナブロンドの柔らかなような髪の少年だった。瞳は灰色で、どこことなく人間離れた氷の煌めきのように冷たい美貌の持ち主だ。

「ルーイ、どきどきに紛れてどこを触っているのよ」

また、人影が現れた。一人、二人、……全部で六人、冒険者のグループだ。全員同じ黒いマントを被っている。

ルーイは、赤くなって、声の主の方をきっとらんだ。

「ふーん、シュンラの洗濯板みたいな体とは、ずいぶん違うなとおもってさ」

「誰が、洗濯板ですって！ それに、いつあなた私の体を見たことがあるっていうのよ！」

「おやめ、ルーイ、シュンラ。彼女の出血がひどい。城に帰って療養させないと」

エドと呼ばれた少年が、二人を制した。

「シュンラ、彼女を連れて、すぐに城までテレポートしてきておくれ」

「お安いご用よ。ただし服だけは着せてね。そんな格好のままでは恥ずかしくてとても連れて歩けそうにないわ」

シュンラは、すらりとした長身に金髪のエルフの女の子だった。カレンの手をとって、テレポートの呪文を唱えた。“RULOR”

たちまち、眩いばかりの光が二人を飲み込み、カレンは手足の感覚を失った。薄れゆく意識の中、カレンの体は吹き飛ばされるように宙を浮いていた。

第一章 受難 その二 城下町

眩い光が見える。見覚えのあるカトマールの街並みだ。その光の中をカレンは、エルフの少女に肩を支えられながら歩いていった。ようやく、光に目が慣れてきた。

寄り添って歩くシュンラは、カレンより頭半分ほど背が高い。尖った耳の先が短めの金髪の下で見え隠れする。今は、黒地に淡い青のローブに着替えている。男性的で、長身の体にはよく似合っている。

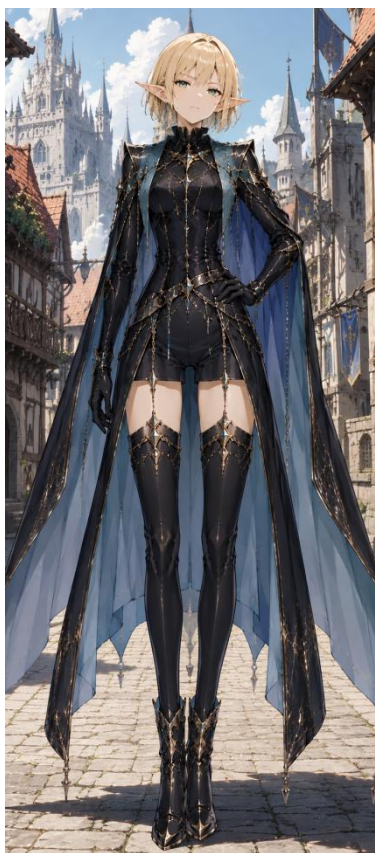
カレンはダンジョンの中で破損した防具の代わりに着せられた丈の長い服に身を包んでいた。胸の下が太い飾り紐で絞り込まれ、赤い刺繍のある襟が少し開き過ぎで、胸の谷間が見えている。激しく動くと中身が出てしまうだろう。冒険者の装備ではなく、村娘がお祭りで着るような服だ。

カレンは、目が慣れるにつれ、今日の出来事を頭の中で少しずつ整理し始めた。でも、まだ頭の中はぐちゃぐちゃで混乱している。こうして再び地上に出て太陽の光のもとで歩いていることが信じられないような気分だ。この近くに冒険者の訓練場がある。カレンが修行を積んだのもそこであり、見覚えのある町並みが続いている。

「サスケは、無口なニンジャ。めったに言葉をしゃべらないの。変人ね。でも、仕事の腕は確かよ」シュンラは、先ほどから一人でしゃべり続けている。今、彼女のグループの紹介を始めたところだ。

「アラミスは、おしゃれなやさ男だけど、剣術の使い手。女たらしという噂もあるわね。私は、シ

ユンラ、見ての通りのエルフ」



「あの……、助けてくれてありがとう」

一方的に話し続けるシュンラに、カレンは、声を出した。

「わたしが助けたわけじゃないわ。あなたを治療したのは、ルイー。プラチナブロンドの男の子、のように見えるわね」

エルフの視線がカレンの胸元に落ちた。

「あいつ。あなたの胸を触っていたわよね。いやらしい。にやけ顔で。不潔だわ。思い出だけでも、鳥肌立っちゃう。そんなお肉触ってどこがいいのかしら」

エルフの無遠慮な視線を受け、”お肉”呼ばわりされている胸元をカレンは両手でかばった。いき

なり触ってきかねない。そう思った。

「でも、ルーイは、エドガーに気があるみたいなの。男同士よ。変態ね。考えただけで悪寒がするわ、あ、もちろん、ここだけの話よ」

「あの……、エドガーって」

「呆れた。あなた、エドガーも知らないの？ あの変態と一緒にいたでしょ」

すでに変態のレッテルを貼られている哀れなルーイの容姿をカレンが思い出そうとしている時、シユンラは声を上げた。

「あっ！ ここのケーキ屋さん、とっても美味しいのよ。今度、食べにくるといいわ」
シユンラは足を止め、嬉しそうに一軒の店を指さしている。

それから、しばらくの間、カレンはルーイの悪口を聞かされた。カレンは、こんなにお喋りで口の悪いエルフを見たのは初めてだった。彼女の知っているエルフという種族は、もっと、しとやかでおりんぱいなものだ。エルフは古代の妖精の子孫だと信じられている。

やがて、城門に着いた。屈強そうな衛兵が、長い槍を差し出し、二人の少女の行く手を遮った。兜の下は髭面が物色するようににらみ回している。シユンラはマントの胸の部分をめくった。ロードの記章。髭面は、バッタのように跳ね返り敬礼した。すぐに城門が開いた。

カレンは、城内に入るのは初めてだった。多くの冒険者たちは、王に謁見し直属の親衛隊にとり

立てもらうため冒険に精を出すのだが、そのほとんどは城に入ることさえ許されぬまま挫折し、元の職業に戻るか、最悪の場合、途中で非業の死を遂げることになる。カレンのグループのように……

カレンは、初めて、助かったという実感を覚えた。それと共に、仲間たちの死という冷酷で重すぎる現実をも受け止めなければならなかった。彼女は、仲間を見捨てて逃げたのだ。この華麗で平和な町並みの中に身を置いて、息をしている自分自身がその証拠だった。しかし、やはり涙は出なかった。

「あなた冒険者に向いてないわよ」

エルフの少女は、唐突にそう言った。言われなくても分かっている。ほっといて欲しい。カレンはそう思ったが口には出せなかった。

「見た感じ、そう敏捷そうでもないし、その細腕じゃ、剣も握れないだろうし、魔法使ってわけでもないわね。冒険者になって何がしたいってわけ？ あなた、女ブリストでしょ。肌も露わな装束で、遠征中に男たちの目を楽しませるくらいしかとりえ無さそう。そうそう、名前もきいてなかったわね」

「カレン＝ダルクよ。出身はサジャ」

無遠慮を通り越して、ぶしつけな言葉を投げかけてくるエルフに、むっとしてカレンは冒険者の作法通りフルネームを名乗った。

エルフの鮮やかな緑色の瞳が見開いて、カレンの顔に向けられた。一瞬だけ間があった。

「ふーん。そういうことか。不思議に思ったけど、なるほどね」

「そういうことって、何よ」

エルフの態度に、つい、カレンは語気を強めた。勝手に納得されても、彼女自身には何の説明にもなっていない。

その時、大きな手がシュンラの肩を掴んだ。そして、有無も言わず、細長い少女の体を百八十度回転させた。見上げるような大男だ。緑色がかった肌、首から上には一本の毛もない。トロール族だ。

「やあ、シュンラ||リスレン殿。エルドールからこっちに来てるって聞いて、捜してたんだ。会いたかったぜ」

雷のような大声、今にも抱き付かんばかりの勢いだ。

「ばばっちい手で触るんじゃねえよ！このうすらでかの脳味噌なし男！」
声の大ききでは、シュンラも負けていない。見物人が集まってきた。城の役人、使用人、女官、御用聞きの人々。遠巻きにして、一様に物見高い目で事の成行きを見守っている。
「なんだよ、水臭いじゃねえか。俺とおまえの仲なのに」



サンプル版

トロールは、意味ありげな笑いを漏らしている。シュンラの顔が、みるみる赤くなった。

「いつ、あんたとわたしが、なにかの仲になったって言うのよ！　なによ！　エドガーがいないと、えらく威勢がいいじゃない！」

「な、なにおう……」

今度はトロールの顔色が紫に変わる。大男は、エルフの衿がみを掴み、その細い体を宙に持ち上げた。シュンラは、ぶら下げられたまま、トロールの紫に歪んだ顔に向かって唾を吐きかけた。

「この、あまア……」

トロールの拳が振り上げられる。

「やれるものなら、やってみな！　わたしの体に傷ひとつでもつけたら、エドガーが、なんて言うか。もっとも、その前にあんたのそのこぶしが使いものになってなければの話だけど」

シュンラの顔色はすでに平常に戻っている。

「けツ！　勝手にしな！」

シュンラの体は地上に戻された。

「てめえら！　見せもんじゃねえんだ！　散れ！」

トロールは、腕を振り回し、見物人を追い払った。

「そっちの乳のでかいネエちゃんは、何ものだ？　どつかで拾ったのか？」

トロールは、カレンに向けて長い腕を伸ばしてきた。シュンラは、盾になってカレンをかばった。無

言でトロールの顔をにらみ返している。

「ヘッー」

トロールは、唾を顔から拭いながら立ち去っていった。五、六歩のところで一度、振り向いて言った。

「可愛いルイー殿よろしくな」

シュンラは、トロールの後ろ姿に向かって、自分の靴を投げつけた。その靴はトロールの大きな背中に命中した。

トロールは、あたりの見物人を見渡して、にやにやしながら独り言のように言った。

「まったく、あんなじゃじゃ馬、誰も乗り手なぞないわな」

トロールの大きな背中中、見物人をかき分けるように消えていった。

「ずいぶん見苦しいところを見せちゃったね」

シュンラは、カレンの拾ってきた靴を履き直しながら言った。

「あのうすらデカは、ガランカという名のトロール。あれでも、ブルーノのお気に入り戦士なんだから、だっというから笑っちゃうわ」

ブルーノは、このラトザール国の王、この城主である。カレンも、戦士ガランカの名は耳にしたことがある。国王の親衛隊きっての実力者として名高い。カレンのような新米冒険者にとっては、雲の上の存在だ。実物を見たのは初めてだった。

「なによ、ボーってして。あなた、あんなのが好みだって言うんじゃないでしょうね」

とんでもない、カレンは、即座に首を横に振った。

「あいつは、悪党よ。わたし、以前あいつにひきような方法で、てごめにされそうになったことがあるの。あッ、でもこれはここだけの話よ、他の人には言わないでね、特にエドガーなんか知れたら、あのトロール、殺されちゃうわ。エドガーは、そういうことには、めっちゃ、うるさいの。あのトロールも、殺されるほどの悪党というわけでもないから」

先ほどからたびたび名前の出てくるエドガーという男、カレンも会っているはずだが、あまり印象に無い。カレンの治療でルーイを手伝っていたのはまだ若い男の子だった。しかし、ガランカの様子からしてもエドガーという人物はただ者ではないらしい。あんな少年が？ どうして？

「この城に来たのは、わたし、久しぶり。でも、ぜんぜん変わってないのね。ブルーノって、頭かたいから、性格悪い上に、頭かたいなんて最低」

シュンラの話題は、早くもよそに飛んでいる。国王の悪口も平気だ。

宿屋は、すぐ見つかった。宿屋といっても、カレンの知っている町の安宿とは、随分違う。城の賓客用の宿泊施設らしい。

「こーよ、こーこー！ 料理はまずいけど、ベッドは柔らかいの」

シュンラは、指さして、無邪気にはしゃいでいる。

中に入り、役人風の男に、シュンラは二言、三言告げる。すぐに、案内役が呼ばれて来た。カレン

は、そわそわし始めた。

「あのう……、私、今、お金持ってないし……」

カレンは、今まで、町の宿屋の代金にも困る生活を送ってきた。しかも、あの洞窟の中で魔物に襲われ、全財産を失ったばかりだ。

シュンラは、またもや呆れたといった顔つきをした。

「あなたを、ここに連れてこさせたのはエドガーなのよ。エドガーの名前ひとつで、こんなおんぼろ宿なんて、フリーパス。あなたの心配することじゃないわ。なにしろ、エドガーは、この城主の客人なんだから」

二人は、部屋に通された。

第一章 受難 その三 横暴なトロール

「エドガーさんって、あの……」

ベッドに横になり、ようやく、カレンは質問を切り出した。二人の通された部屋は、大理石作りの浴槽を備えた立派なものだ。見たことのないような大きなベッドの片隅に、カレンはもぐり込んだ。

「あなた、もぐりじゃないの。ハートン兄妹のことを知らない冒険者なんていないわよ」

もちろん、ハートン兄妹のことは知っている。かつて、闇の魔力でこの国を蹂躪した魔王アーサーを倒した英雄だ。もう、十年以上昔の話になる。カレンは、まだ小さかった頃、ハートン兄妹の凱旋に村はずれの沿道に出て手を振った記憶がある。

「そのハートン兄妹の兄の名が、エドガー。エドガー＝ハートン」

「でも、それは十年以上も前の……」

カレンの言葉に話を中断され、シュンラは少しだけ困惑の表情を見せた。

「わたしも、事情は良く知らないのよ。エドガーは、強力な魔法によって、歳をとらないらしいの。不死の一族だって噂もあるわ。……噂だけど、アーサーの甥だって言う人もいるし、そうなるってヴァンパイアね」

シュンラも、エドガーの噂話となると声が低くなった。

「そうだ、わたし、薬草を調査してもらってくる。待っててね」

ドアが閉められ、エルフのせわしげな足音が遠ざかって行った。

カレンは、一人、広い部屋に残された。彼女はベッドに横たわったまま部屋の豪華な調度品の数々を見回した。初めて目にする類の品も多かった。それらの贅沢品の存在は、話に聞き知っていた程度であり、十八歳の少女には、名前も用途も分からない品も多かった。金銀細工の工芸品が、部屋の隅、棚の上等いたる所に据えられている。壁に掛けられたタペストリーは、彼女が村長の屋

敷で見たことのあるものに較べ、ゆうに二倍はある。そして、見事なたてがみの白い馬の絵が刺繍されている。

シユンラから渡された真新しい下着の肌触りも初めて体験するものだった。これが、噂に聞く絹というものだろうか。その下着は、実用よりも装飾を重視したもののように彼女には思えた。あまりにも薄過ぎるのだ。

もう、体の痛みは消えていた。ルーイの言った通りだ。彼の使った治療呪文のMACUREやレポートの呪文RULORは、熟練の術者のみが操ることのできる極めて強力な魔法だ。高度な集中力と技量が必要とされ、仕損じると命を落とすといわれている。カレンがそれらの術を目にするのは初めてだった。カレンは、左脇腹の傷のあったはずの部分を恐る恐る触ってみた。確かに傷は跡形もなく消えている。もと通りの滑らかな肌。驚くべき完全治癒だ。傷は内臓にまで達していたはずなのに。

今日、一日であまりにも急に、あまりにもたくさんのお出来事がカレンの身を襲った。なんだから、全てが悪い夢か何かだったような気がする。

そう、冒険者になったこと自体、夢であり、目が覚めると彼女は、平凡な家庭の一人娘であり、母親がミルクを沸かしているのだ。鶏の鳴き声、山羊が水入れの器をかきまわす音、遠くの方では荷馬車の轍がきしむ音。彼女にもそろそろ縁談の話が持ちかかっており、幼馴染みで働き者のピーター、お金持ちのマクベランさんちの三男坊、世話好きのエルーネおばさんが毎日のように家に

来て噂話を披露する。やがて、カレンも平凡な結婚をし、幸せな家庭を築き、三人か、四人の子どもを産み育て、時折、悪い魔物の襲来、はやり病におびえながらも、さして大きな挫折もなく日々平穏な暮らしを全うしてゆく。そして、子どもの頃は私もおてんばで、ちゃんばら遊びが好きで、冒険者の真似事をして近所の悪ガキどもとくろげまわったものだ、といった話を、半信半疑の孫たちに話して聞かせることだろう。

つい半日前まで一緒だった仲間たちがすでに死んでいるだなんて信じられない。ドワーフ族のエイモス、ホビット族のペデ、女魔法使いのシャリーン、酒飲みのベン、みんな相変わらず居酒屋でたむろし、愚痴をこぼしているに違いない。なるほどエイモスは少し乱暴なところがあるし、ペデはおつちよこちよいだ。シャリーンは疑い深く、派手好きだ。でもどのみち、殺されるほどの悪人じゃない。ベンは、……。三十代の前半だと自称していた、上背のある茶色の髪、茶色の髭の男で、子どものような目をし、いつも夢のようなことばかりしゃべっていた。カレンの初めての男だ。

つい、ゆうべのことだ。村の小さな宿屋にカレンたちは宿をとっていた。一階の居酒屋でいつものように飲んで、愚痴を言い合ったり、冗談を飛ばしたりしている最中に、ベンが、カレンに目配せを送った。それは、いつもの合図だった。まずベンが席を立つ。ちよっと間を置いてカレンも席を立つ。仲間たちは、そんな二人の仲を薄々感知していたのかもしれないが、誰も口に出して言う者はいなかった。ベンは、二階のベランダで待っていた。歩くと木のきしむ音がする。春の宵、風が心地良い。

いつもの抱擁、いつものキス、ベンの大きな手はカレンの髪を優しく撫で、髭がくすぐったかった。この村に身を落ち着け、小さな店でも出して、平穩に暮らしたい。粗末だけど陽を浴びた芳しい匂いの残るベッドの枕元でベンがそう言った。いつも夢物語ばかりしている男がそんなことを言い出すなんてカレンには信じられなかった。そして、彼は言った、一緒に生きてくれないかと。

もし、あの時承諾していたら、彼女たちのグループは、無謀な冒険に出発することもなかったのではないか。エイモスもペデもシャリーンも、驚き、ひやかしながらも二人の決心を祝福してくれたことだろう。また、新しいメンバーを捜さなければ……、エイモスはそんな愚痴をこぼしながらも、自分たちが夢を追うにはすでに歳を取り過ぎた事実に気付くことだろう。

ルーイや、エドガー、シュンラたちなんて、雲を掴むような話だ。あんな若いロードなんているはずがない。全て夢なのだ。そう、今この目を開けるとそこには……

ドアが開いた。大きな男が、身を屈めて窮屈そうにドアをくぐった。緑色がかった肌。トロール族だ。

これも夢の続きなのだろうか。カレンはそう考えていた。体が動かない。悲鳴をあげることさえ出来ない。

「あの小うるさいシュンラはいないようだな」

ガランカは、部屋の中を見渡した。この大男がいると部屋が狭く感じられる。

「おっと、恐がらないでくれよ。おれは、見ての通り紳士なんだ。ちよっとあんと話がしたくて

ね。あのエルフの小姑娘がいるとじゃまだろう」

カレンは、ベッドの上で毛布にくるまったまま後ずさりした。

「おれは、カトマール国王直属の親衛隊組頭、名前は、ガランカⅡサミエ。サミエ家は、代々、国王に仕え、親衛隊を務める冒険者の由緒正しい家柄だ。もちろん、戦士だ。きみは？」

こう改まって冒険者としての名乗りをされると、それに返答せざるを得ない。

「わたしは、カレンⅡダルク。プリーストの修行を積んだ冒険者です。師は、カトマールのエリックⅡジャルバ」

「カレンか、いい名前だ。歳は、いくつだ？」

「冒険者どうしで、そういう質問は無用のはずよ」

「冒険者ね」

ガランカは、笑っている。明らかに彼女のような新米冒険者を見下している様子だ。彼の、王室親衛隊筆頭組頭という地位からすると無理もない。彼女の師、ジャルバもガランカから見たら名も無い冒険者の端くれに過ぎないだろう。

「さて、その冒険者殿に尋ねたいことがある。なぜ、エルドールのロード、シュンラⅡリスレンと一緒に城に来た？ あんなのが友達ってわけはないだろう。エドガーⅡハートンのさしがねか？」

また、エドガーだ。カレンは、うんざりしてきた。ガランカの彼女を見下した態度も気に障る。冒険者は自由平等をモットーとし、独立独歩の精神が旺盛なのだ。地位と知名度の差はあっても、

それを振りかざされるのは気に入らない。不愉快だ。そもそも、今日彼女を襲った出来事をこんなぶしつけな大男に説明する気になんてなれない。ほつといて欲しい。しかも、今ここは、彼女の部屋だ。白昼堂々と案内も請わず初対面の女の部屋に押し入ってくるなんて、非常識極まりない侮辱だ。シュンラが言う通り、ろくでもない男に違いない。何が紳士だ。容赦なく仲間を焼き殺した化け物、彼女の脇腹をえぐったワーベアの鋭い爪。みんな同じだ。何故こうも、理不尽な出来事ばかり起こるのか。子供のころからの夢だった冒険者としての道を歩み始めた彼女は、力と自信に満ち溢れているはずだった。それが何故、こんな仕打ちを耐え忍ばなければならないのか。何故、こうまでして生きているのだろう。彼女は、そんなことを考えていた。“なぜ、わたしは、ここにいるのだろうか？”

「答えられないのなら、体で答えてもらってもいいんだぜ」

ガランカは、カレンの被っていた毛布を無理やりはぎ取った。カレンはガランカとの距離を見計らっていた。体は動かせる。彼女は、近づいてきたガランカの急所を下から力任せに蹴り上げた。ガランカは、彼女の反撃を予期していなかったのか、体勢を崩してよろめいた。その隙にカレンは、太い腕をすり抜けて、床に立った。出口のドアに向けて飛ぶように走りだす。しかし、彼女の体力はまだ回復していなかった。カレンは、目眩を感じた。床が異様に柔らかい。まるで、大きな焼き立てのパンの上を走っているようだ。彼女は、そう思った。目の前が真っ白になり、床に倒れ込んでしまった。

「おたのしみのところ、もうしわけないけど、そこまです。ガラシカ。エドガーから預かったお客さんを傷物にされちゃかなわないもの」

いつの間に部屋の中に入っていたのだろうか。窓枠にエルフの少女が座っているのだ。長い足を組み上げ、頬杖をついている。頬にかかる金髪がカーテン越しの光に透き通るようだ。



「へっ！ 帰ってきてたのか。エルドールの鬼神め」

ガランカは、間が悪そうに言っ、すでに逃げ腰になっている。

「続きはまた今度楽しませてもらうぜ、カレン」

そう言い残して、大男は、部屋を出て行っ。

カレンは、床に倒れたまま泣いていた。冒険者として、女として、自分の無力さが無性に悔しく、涙が止まらない。今日一日、こらえていたものが堰を切ったように、涙が後から後から溢れ出した。初めての冒険で戦闘の支援を任されているながら、傷ついた仲間を手当することなく、なすすべもなく逃げ出した。なぜ逃げたのか。なぜ仲間たちと一緒に死ななかったのか。カレンは生き残った我が身を呪う思だった。しかし、この時彼女は、その細い肩にかせられることになる過酷な運命の重荷をまだ知らなかった。

エルフの少女は、窓枠から跳び降り、カレンに近づいてきた。

「不思議だわ。あなた、魔物に襲われて殺されそうになった時にさえ泣かなかったでしょう。人間って弱い生き物だから、ああいうときは死にたくないって泣きわめくものよ。それなのにどうして男に乱暴されそうになったくらいでそんなに泣くの？ あのとロール、そんなに恐かった？」

「どうして……」

カレンの唇が小刻みに震える。

「あなた、ルーイが好きになったんでしょ？ だから、泣くんだけ。でも、安心して。わたし、告

げ口なんかしないから。あなたとガランカがいい仲だって。もっとも、たとえば告げ口なんかしくても、ルーイがあなたなんか好きになるはずないけどね」

“何を言ってるんだろう、この子。”カレンには、最初、シュンラの言葉の意味がわからなかった。そもそも、シュンラは、いつからこの部屋に戻っていたのだろう。

「あ、あなたが仕組んだのね！」

「何を？」

「あなたが、あのトロールを引き入れたんだわ！」

「冗談はよしてよ！ エドガーから預かったお客にそんなことするわけじゃないじゃない。殺されちゃうわ。言っといたはずよ。あのトロールはああいふ奴だって。それに、あなた、まんざらでもなさそうだったわよ。わたし、邪魔しちゃ悪いかなと思っただけよ。案外、あなたから誘い込んだんじゃないの？」

シュンラは、カレンの目の前まで迫っていた。しかし、カレンの振り上げた平手は、ごく簡単にシュンラに制止されてしまった。

「生意気な口をきくんじゃないわ！ このガキ！」

シュンラに右手をねじり上げられながら、カレンはそう叫んだ。

「ガキって、誰のこと？」

「あなたよ！ 決ってるじゃない！ わたし、少なくともあなたは年上のはずよ。あなた、い

くつになるのよー！」

「もうすぐ百九十二歳になるわね」

「からかってるの……」

「エルフって、人間よりは幾分長生きするのよ。わたしは、まだまだ子どものほうね。でも、あなたなんか、ガキ呼ばわりされる覚えはないわよ」

シユンラは、カレンの体を床から抱え上げた。華奢な少女の体からは想像できないような力だ。まるで床に落ちた毛布でも拾い上げるように軽々とカレンの体をベッドまで運んだ。

「いや！ 触らないで！ 化物」

「人間の悪い癖ね。自分たちの種族以外のものはなんでも化物にしちゃう。でも、今は、少しでもおとなしくしてね。まだ体力が回復してないんだから、薬を飲んでちゃんと寝てなきゃだめよ」

第二章 王都カトマール その一 出頭命令

岩肌に鉄製の扉が埋め込まれている。鍵がかかっているようだ。人間の手による物ではないことは、そのまがまがしい細工からも明らかだった。ガランカはその扉に体当たりした。扉はびくともしない。

「おい！ ラル！ 出番だぜ」

名前を呼ばれたホビットは鍵穴の前にしゃがみ込んで、作業を始めた。ホビット族は、敏捷で手先が器用なことで知られている。仕掛けられた罠を解除したり鍵を開けたりする作業には無くてはならない存在だ。

「気をつけろ。何か罠が仕掛けられているかもしれない」

ガランカは、身を屈めてその作業を覗き込んだ。

「こいつは駄目だ。おいらの手にはおえねえ」

ラルは、あっさりで見切りをつけて、立ち上がった。背丈はガランカの半分程もない。

ガランカは、太い首を回して。後ろを振り返った。そこには二十代半ばの人間の女性が腕組みをして立っていた。燃えるような赤毛が緩やかに波打って色白の額を縁取っている。その奥の鋭い眼差しから聡明さがにじみ出ているようだ。名前は、フレイア。洞窟や迷路内の道筋を地図として書き残し、道案内をするのは彼女の仕事だった。フレイアは大げさに首をすくめて見せた。

「こんな洞窟に一体なにがあるってんだい、ガランカの大將」

戦士のロアルドが、大きな盾に身をもたせてしゃがれた声を出した。

「エルドールから来たエドガーIIハートンがこの洞窟に向かったって、話を聞いたんだ。奴は何かを掴んでいるに違いない。」

「あんたはあのエルドールの大將を気にし過ぎてんだよ。奴さんも歳だ、もうろくしてんじやねえかい。こんな洞窟入ったはいいが、何もねえじゃねえか。出てくる魔物連中も弱っちいのばかり、逃げるばかりでへのつぱりにもなりやしねえ」

「ハートンは、もうろくなんかしない。奴は歳をとらないのだ」

ガランカは、太い腕を組み合わせ、しばし考え込む様子を見せた。とにかく前進だ。彼の合図のもと、冒険者たちは、洞窟の奥へと歩き出した。

冒険者は、異なる技能を持つ者同士がグループを組んで行動する。その数は、通常五、六人。それが未知の世界を冒険し生き残るために最も効率的な人数だ。彼らは、戦士ガランカをリーダーとする国王直属の親衛隊のメンバーだった。一方、エルドールは、自治市政をしく共和都市の名だ。この国の東のはずれにある港湾商業都市である。かつてこの国を恐怖のどん底に落とし入れた魔王アーサーに復活の兆しありとの報告を受けた国王ブルーノは彼の親衛隊に調査を命ずるとともに、エルドールへも援助を求めた。エルドールの長老会議は事態を重くみて、ハートン兄妹の派遣を決定した。

ブルーノの狸じじいは、ハートンを信頼している、このおれ様よりも……。ガランカは、この数日心染しめない日々が続いた。昨日あのエドガーに拾われたという女、カレンとか言っていた、いい女だ。磨けば光るだろう。重い艶のある真直な黒髪は、細いバネのような張りがあり手に心地良かった。結び上げたら見事な髪形になるに違いない。大きな胸に鋭くくびれた腰。幼さが残るものの美しい顔立ち。欲しい、なんとしても手に入れたい。ガランカは、そんなことを考えていた。その一方でエドガーの報復を恐れてもいた。有り得ないことだとは思うが、もし、エドガーがあの子に執着しているとしたら……

その時、ラルが何かを見つけた。粗末な兜だった。戦士のものだ。その近くに鎧の一部、さらにおびたらしい数の死体の断片が散乱している。焼け焦げたものの骨だけになったもの、見るも無残な光景だ。

「こいつは、ひでえ！ まだ、新しいぜ。ほぼ全滅だったんだな」

ラルは、死体を調べながら言った。

「火を吹く魔物に襲われたらしいな。このあたりにそんな物騒なものがあるとは思えないが。まさか、ドラゴンじゃねえだろうな」

ガランカは、大きなシャベルを持ち出して来て穴を掘り始めた。

「埋めてやろう。身の回りの品をひとつずつ持ち帰って、地上に墓を作ってやればいい」

「まさかドラゴンに襲われたのではないでしょう。通路の大きさから考えても。ケルベロスあたり

じゃないですか」

プリーストのイッキユウが、胸の上に指を組み合わせ口の中で死者埋葬の呪文を唱えた。常に危険と隣合わせの冒険者たちは縁起をかつぐ。これもプリーストの重要な仕事のひとつだ。

全員言葉少なに埋葬作業を続けた。死者の呪いほど恐ろしいものは無い。

「どのみち、あまりまともな話じゃねえ。復活した魔王の力がこんなところまで影響しているのかもしれないな」

ガランカは、そうつぶやいた。最近方々の洞窟で奇妙な現象が起きているという話を耳にする。さっきの開かずの扉のことも気になる。魔王アーサー復活の噂は本当かも知れない。魔の力は地下深く太陽から遠ざかれば遠ざかるほど強く作用するという。この国の地下で何か変動が起ころうがあるのかも知れない。これ以上の探索は、もっと地上での情報収拾を進めてからの方が良さそうだ。冒険者というものは、本来、慎重を期すものだ。

ガランカは、集められた犠牲者の所持品を調べながら、小さな手鏡に目を止めた。細い字が彫つてある。「我が最愛なるカレンⅡダルクに贈る ベンⅡシュワルガー」

シュンラは、薬を置き。用法、用量を守るようにと言い残して去った。カレンは一人残された。食事等身の回りの世話は小間使いの少女が面倒を見てくれた。カレンは、小間使いというものを見るのは初めてだった。シュンラと対照的な無口な少女で、宿屋の使用人と手話で話しているのを見

て、言葉に不自由であることを知った。だから、名前は聞けなかった。歳格好は十三歳ぐらいで、赤毛の髪をおさげにして両側に垂らしている。顔にはそばかすがあり、痩せて、いやが上にもみすぼらしく見えた。田舎の貧しい家から奉公に出されたのだろう。あるいは、両親に死に別れたのかも知れない。カレンもそういう子供たちの話を聞かされたことがある。

カレンは、不安だった。ガランカは、また来ると言い残した。だから、この痩せてはいるが俊敏そうな少女に出来るだけ長く側にいて欲しかった。なんといってもこの子はエルフではない、人間だ。小間使いの少女は、体を洗うことから服の着替えまで手伝ってくれた。カレンには初めて体験することばかりだった。

そうして、二日間が過ぎた。カレンの体力はすっかり回復していた。もう、以前のように飛び跳ねたり走ったり出来そうだ。カレンは、体を持て余し始めた。城の中を見て廻りたいとも思った。でも、そんなこと許されるのだろうか？ シュンラが迎えに来るのを待たなければならぬのだろうか？ あのエルフの少女を信用することは出来なかった。カレンは、用意された外出着に着替えた。胸にはプリーストの記章がついている。赤毛の少女は、自分の客人の立派な姿を見て嬉しそうだ。手を叩きながら若い冒険者の回りをまわった。カレンも無性に嬉しくなって、笑顔を見せた。

その時、ドアの外が騒々しいのにカレンは気付いた。ノックと同時にドアが開くと、そこには完全武装した衛兵の小隊がいた。きらびやかに着飾った役人風の男を衛兵は囲んでいた。

「カレンⅡダルク殿。国王陛下のもとへの出頭命令が下りました。即座にご同行願います」

男は一步踏み出して、手にした巻紙を広げながらそう言った。態度は慇懃だが、彼の表情にも衛兵にも、愛想は一切無かった。



サンプル版

国王ブルーノ・コルテリアスは、大広間の一番奥、とてつもなく大きな椅子に腰掛けたまま、カレンの最敬礼を受けた。カレンも冒険者の敬礼の作法を習っていた。いつの日か国王へのお目通りがなくなった時のためだと言われていた。冒険者の最敬礼を受けることが出来るのは国王だけなのだ。今こうして、その夢の様な機会に恵まれ、事実、夢の様であり、やっぱり、何が何だか分からない。自分の置かれている状況が全く理解出来なかった。

ブルーノは、側近の一人に何事か耳打ちした。その側近は、三十メートル程も離れたところに立っているカレンの側まで来て、そつと言った。

「お近く、お寄り下さい」

近くと言われても、どこまでが遠く、どこまでが近いのかよく判らない。修行の師もこういう場合の対処法までは教えてくれなかった。たぶん、彼にも経験がなかったのだ。

カレンは、おずおずと歩を進めた。両わきにずらりと並ぶ衛兵の長い槍が気になった。

「冒険者殿」

ブルーノの低い声にカレンは歩を止めた。

「まだ、御尊名を伺っておらなんだな」

「カレン・ダルクです」

カレンは緊張のため頬の筋肉が突っ張るのを感じた。

「では、カレン・ダルク殿、そのような遠くにおらずと、もちっと近こう寄って下され。見れば見

目麗しきお人柄。このような粗暴な場所では何よりの目の保養じゃ。さっ、近こう」

床に敷かれた絨毯の色が変化している場所がある。カレンは、そこまで歩を進め、片膝を突いた。

「本来ならば、時候の挨拶などいたすところじゃが、失礼して、さっそく本題に入らせていただくぞ」

ブルーノは、話を切り出した。

「カレンⅡダルク殿、ご存じとは思いますが、あの国賊アーサーが復活した。そこで、わしは、エルドールのエドガーⅡハートン殿に救援を請うた。ご存じの通り、エドガーⅡハートン殿は、かつて、あのアーサーを成敗したつわもの。必ずや、力になってくれるものと信じておる。ところがどうじゃ、エドガーⅡハートン殿、一向に姿を見せてくれぬどころか城下まで参った配下のシュンラⅡリスネン殿は、カレンⅡダルク殿そなたを置いて姿を消してしまわれたと聞いておる。しかも、そなた、どう見てもただの小娘にしか見え……失礼、今のは失言じゃ。とにかく、以上が、この件につきわしの受けた報告じゃ。どうなんじゃ、カレンⅡダルク殿、わしを助けて下され。いや、この国を救うて下され。国賊アーサーを倒す秘策をお持ちであろう。それとも、エドガーⅡハートン殿から何か言付けを頼まれたのか」

ブルーノは、ひとつのアミュレットを懐深くから取り出した。持つ手が震えている。

「この、かつてエドガーⅡハートン殿によって、アーサーから取り戻していただいたアミュレット、

これさえあれば安心じゃと思うておる。しかし、もしこのアミュレットがアーサーの手に渡るようなことになれば……、それを思うと、夜も眠れぬ日々が続いておるのじゃ」

震える老王の手の中でまがましいばかりの光を放つアミュレットは、カルハンの雫という名で知られる伝説の宝物だ。もちろん、名前は知っていても、カレンが目にするのは初めてだった。

「当然のことながら、アーサーめの第一の狙いは、このアミュレットと、このわしの命じゃ。その後で、やつは全世界を魔の支配下に敷くつもりじゃろう。このわしが狙われておるのじゃ！ それなのに、エドガーⅡハートン殿は、何処で何をしておる！」

ブルーノは、立ち上がろうとした。側近たちが駆け寄り、懸命に制止した。

当然の事ながらカレンは面喰らった。ほとんど初めて聞く話ばかりだ。確かにあの魔王アーサーが復活したら大変な事になるだろう。魔物が地上に溢れ出て、無抵抗な村人たちが殺されるのだ。かつてそうであったように。だが、その事と今の彼女の置かれている状況がどういう関連を持っているというのだ。私は、エドガーに拾われただけの、哀れなただの女だ、と叫びたかった。でも、それは出来ない。ただの女が、伝説の魔法器カルハンの雫を目にすることが出来ないということはカレンにも容易に分かる。へたなことを言うと言殺されてしまうかも知れない。まったく、エドガーに助けられたのはいいが、その事によって、どうして、こうも次々と災難に巻き込まれなければならないのか？ エドガー、エドガーって、一体、何者だというのだ。エドガーはアーサーの甥だという噂をシュンラから聞いた。そうだ、国王の最も恐れているのはエドガーとアーサーが手を結ぶ事な

のだ。だから、姿を見せないエドガーに国王は憤りを感じ始めている。だとすると、カレンの置かれている状況はなお悪い、エドガーの人質だということになる……

その時、後ろの方で騒ぎが起こった。その騒ぎの中心にいる雲をつくような大男を見て、カレンの血の気はさらに退いた。

ガランカは、衛兵たちの手を振り払い、大広間の中心まで進み出た。

「敬愛なる国王陛下には御健勝のほどお慶び申し上げます」

雷のような大声が大広間中に響きわたる。

「ガランカか、挨拶などよい。何事じゃ？」

ブルーノは、大きな椅子に身を沈め直し、そう言った。

「さすれば、申し上げます。そこにお召しになられているカレンⅡダルク殿についてでございますれば。陛下には、ご報告の行き違い上、誤解をなされている様子。そもそも、カレンⅡダルク殿、エドガーⅡハートン殿の客人にはあらず。このガランカⅡサミエが遠縁にあたる者にてあれば、若年なれど文武に秀で、ことにプリーストの技術にかけてはこの国広し、その人士多しといえど並ぶもの無しと存する次第。この時期にてもあれば、一度、陛下に御拝謁を賜らんものと画し、ご城下まで呼び寄せました次第にてございます」

流れるような口調のでまかせだ。カレンは呆れた。

「じゃが、そのような報告は受けておらぬ。わしが、聞いたのは……」

「さすれば、それは、ご報告の行き違いにて」

「ええい！ 黙らぬか！ わしの言葉をじやまだてするとは何事。しかも、そのような優秀な冒険者ともなれば、わしの耳にも聞こえてこようはず。きりは袋の中に入れられてもその切っ先を見せるという話がある」

「さすれば、今、この場で入れてご覧に見せましょう。切っ先どころか、その刀身すべてが突き抜けます。カレンⅡダルク殿、きりにあらず太刀にてござる」

ガランカは、ブルーノに歩み寄った。

「しかし、そのような一介の冒険者に、わしは、大切なアミュレットを見せてしもうた。よもや、アーサーの手先では」

ブルーノは、慌ててカルハンの雫を懐深く隠し込んだ。ブルーノの言葉に衛兵は色めき立ち、長槍を構え、哀れなカレンを囲んだ。

「魔王アーサーの手先などであろうはずがござらぬ。陛下は、優秀な人材をいわれ無き罪で損なうおつもりか。どうか、お気を鎮めたまえ。しかも、カレンⅡダルク殿、わが遠縁にありながら、また、わが許嫁にてござる。許嫁を刀にかけられるをば、このガランカⅡサミエ黙つて見過ごすことは出来ませぬ！」

ガランカは、衛兵たちの槍を素手で払い除け、カレンの横に立った。ガランカの体は衛兵たちよりさらに頭ふたつ分以上抜きんでている。ガランカは、カレンを抱き起こし、素早く目配せをした。

「お疑いなら、今、その証拠をお目にかけまする」

ガランカは、上体を屈め、カレンと唇を重ねた。カレンは、突然の出来事に慌てたが、大男の体を振り払うことはできなかった。衛兵たちの槍先は、二人をぐるりと取り囲んでいる。カレンも、今は、彼の芝居に応ずる以外助かる道はないと観念した。そして、筋肉の盛り上がった大男の背中にぎこちなく手を掛けた。ギラギラと光る槍の輪の中で長いキスが進行した。

衛兵たちは戸惑った。相手が刀を抜いたわけではない。国王に危害が加えられる恐れもない。しかし、前例の無い事態だ。国王の面前である。こういう場合の対処法は訓練されていない。とてつもなく恐れ多い事ではあるが……

「もうよい、分かった、ガランカよ」

ブルーノは、手を振って、衛兵たちを退かせた。衛兵たちは、ほっとしたような面もちで各々の持ち場に戻った。

「そなたの許嫁であるとするれば何の咎めがあろう。して、カレンⅡダルク殿、すでに妙齡とお見受けするが、祝言の日はお決まりか？」

「さすれば、すでに、日時、方角など縁起の良いように占いを立てさせていただいておりますれば。全て、相整いました折りにでもご報告させていただこうと考えておりましたところでございます。ご報告の遅れ、なにとぞ御容赦のほど御願ひ奉りまする」

第二章 王都カトマール その二 結婚

カレンは、ガランカの腕を肩から払い除けようとした。王宮の大広間に通じる通路だ。あたりに、人影は無い。

「助けていただいて、ありがとう。でも……」

激しく身をもがいて、大男の広い胸からの脱出を試みた。

「しっ！」

ガランカは、彼女の口を手の平で押さえ、人目に付きにくい柱の陰まで引っ張り込んだ。カレンはその手に思いきり噛みついたが、ガランカは平然としている。

「宿に行ったら、こつちだつて聞いてね。こんなことだろうと思って駆けつけたんだ。間に合つて良かった」

ガランカは、カレンの体を壁に押し付け、両腕の間に虜にした。

「それでも、心配したんだぜ。ブルーノは陰険な強欲じじいだからな」

「その事については、感謝してるわ。でも、それとこれとは問題が別よ。わたし、あなたの許嫁でもないし、愛人でもないの。わたし、そんな安っぽい女じゃないわ」

カレンの顔に血の色が浮かび上がる。押さえきれない怒りが込み上げてくる。

「それに、あなたは、傷ついたわたしを無理やり襲おうとしたのよ。今だったら、あなたを殺して

やるわ、たとえ、刺し違えてでも。それに、わたしにはもう心に決めた人がいるの。優しい人よ、あなたとは大違い。おあいにくさま。どいてよ！ 大声を出すわよ。あなたが、カルハンの雫を狙っているって叫びながら死んでやる！」

カレンは、ガランカのぶ厚い胸板を殴った。一発、二発と、涙が込み上げてくる。なぜか、ベン的身影が心をよぎる。あの自信なさげな笑顔が無性に懐かしい。今にして初めて彼への愛を自らの感情として意識したのだろうか。もう死んでいるかもしれないのに。

「ベンは死んだ」

ガランカは、そう言った。

「うそよ！ 信じてないわ！ 彼のことだものきつと逃げのび……。どうして、あなた、彼の名を知ってるの！」

カレンは、両手でガランカの胸ぐらを掴み、大男の顔をにらみ込んだ。

ガランカは、自分の胸から彼女の手を引き剥し、その手に小さな手鏡を握らせた。カレンは、そこに記された文字を目で追った。

“我が最愛なるカレンⅡダルクに贈る ベンⅡシュワルガー”

「昨日、洞窟の中で発見された犠牲者の遺品だ。五人のグループが全滅していた」カレンは、食い入るように手鏡を見ていた。

「おまえは、そこにいたのか？」

「……」

カレンは無言でうなずいた。

「相手は何物だ？ ケルベロスか？」

「わからない。火を噴いていたわ。口が耳まで裂けていて。いきなり襲いかかってきたの」

「それで、おまえ一人だけ、エドガーに助けられたんだな」

「へんなの。あの人、言ってたのよ。その前の晩だったわ。一緒に暮らしたいって。店を持とおって。あんな事言う人じゃなかった。だらしなくて。夢ばかり追いかけて。貧乏で。この鏡を買うだけでも苦労したはずよ。それが、こんな事になるなんて。もし、あの時承諾していれば……」

カレンは、ガランカの胸にすがりついた。涙が止まらない。

「おれも、本当は優しいんだぜ。紳士なんだ。きみがそんな目に遭った後だとは知らなかったよ。だって、きみは綺麗で可愛いくて、キラキラ輝いていた。今だってそうだ。もっと素晴らしい。きみに涙は似合わない。無理やり許婚ってことにしたのは謝るよ。でも、本当にそうなら、どんな苦労もない暮らしをさせてやれると約束できるぜ。毎日、遊んで暮らせるんだ。着飾ってお洒落に興じて、演劇、お茶会に舟遊び。人気の吟遊詩人も呼んでやろう。このカトマールは、美しい都だぜ。美しい都には、きみのような美しい女が似合うんだ」

ガランカは、カレンの髪を撫でた。カレンは、ようやく泣き止んだ。

「いつまでも、こんな所にはいられない。行こう」

「どこへ？」

「おれの家だ」

「いやよ！ 絶対いや！」

「あの宿には戻れない。もし、エドガーが現れた場合、あらぬ疑いをかけられるだろう。おれの家なら安全だ」

「あなたが信じられない」

「信じてくれ。頼む。何もしないよ。指一本なりとも、きみには触れない。約束するよ。それとも、さっきの部屋に戻って前言を撤回するかい」

「……」

カレンは、泣き張らした目で小さく首を横に振るしかなかった。

ガランカの家―それはお屋敷と呼ばれる類のしろものだった―は大きかった。王宮を囲む城下町の一角にあり、たくさんの使用人が働いていた。これが、個人の住宅。カレンは、国王直属の親衛隊組頭の生活を覗き見る思いだった。彼女は、その中の一室に案内された。それは、二日間暮らした宿屋の部屋をひとまわり小さくしたような寝室だ。しかし、内装はずっと豪華だった。大理石作りの洗面台の蛇口は純金細工らしい。部屋には沢山の女性物の衣装が用意してあった。上等な生地を惜しげなく使った美しい服ばかり。いつの間に揃えたのだろう。どれも皆、カレンの体

のサイズに合わせてあるのだ。もともと、中には思わず赤面してしまうような大胆なデザインの服もある。特にひどい一枚はほとんど服としての機能を持っていない。透け透けで穴だらけだ。これが、ネグリジエと呼ばれる種類の服なのかも知れない。名前だけは聞いたことがある。城の女性たちが好んで夜に着用するらしい。でも、どういう用途があるのか分からない。どうせ、ろくでもない事に使うに違いない。カレンは、その薄布をもとの場所へしまい込んだ。

キラキラ光る石が、ドアの取っ手やベッドの支柱などに埋め込まれている。噂に聞く宝石という物かも知れない。多くの冒険者たちが、夢物語に探し求める宝物だ。ルビー、サファイア、ダイヤモンド、名前だけならカレンも幾つか知っている。でも、どれがどれだか分からない。

部屋の中には大きなベッド。それは、宿屋の物よりさらに大きく、絹の天幕が張られ、中が見えない。壁には大きなタペストリー。白い馬に乗った騎士の模様が刺繍されている。

カレンは、ガランカと夕食を共にした。テーブルの端と端に別れて二人で座り、給仕がついでくれる物を食べた。食器はほとんど全て銀製。蝋燭立ては金と銀。艶やかに光るテーブルクロスは絹製だろうか。

「そんなに珍しいかい？」

ガランカは、物珍しそうにあたりを見わたしてばかりいるカレンに声をかけた。にこやかな自信溢れる笑顔。

カレンは、むっとした。

「ちよっとね」

少し唇を尖らせて、なるべく気取った風を装った。

「ははははは、こいつはいい」

ガランカの高笑いが広い室内に響いた。

ガランカの屋敷での日々は何事も無く過ぎた。意外にもガランカは約束を守り、カレンに触れようとすらしなかった。毎夜のようにカレンの部屋を訪れるが、ただ二言、三言、会話を交わすだけでおとなしく去って行く。

「何か欲しい物があつたら。遠慮無く言ってくれ」

それが彼の口癖になった。カレンは城下に外出することも許された。そして、部屋に戻ると、知らない間に目新しい衣装が増えていることに気付くのだ。どれも計ったように彼女の体に合わせ、豪華な品々。今までの彼女の暮らしの中では考えられないような服ばかりだ。その周到な準備について聞いたとしても、ガランカは笑って話をこまかすだけだった。ガランカの用意してくれた服を着飾って賑やかな町を歩き、道行く人々の視線を集めることは、カレンの日課になった。春の陽気の中、奇妙なまでに平和で華美な日常が彼女の心に染み込んでくる。カトマールは、美しい都だった。

カレンは、屋敷内の家事を手伝い始めた。何もしないで世話になるのは、引け目を感じるようではないやだった。掃除や台所仕事、洗濯などにいそしむのは随分久しぶりだ。彼女らのような名も無い冒険者には定住する家もなく、各人がそれぞれ各人の生活全般の責任を持つというのが原則だった。冒険者に男と女の区別は無い。あるのは、各々の職能に課された各々の役割のみだ。日常生活において、他人の身の回りの世話をしたり、されたりすることは無かった。

屋敷の使用人たちは、カレンのことを奥様と呼んだ。呼び間違いを指摘しようとする彼らは困惑の表情を浮かべた。彼らにとっては、旦那様の大切なお客人とでもいった意味なのだろう。カレンはその呼び名を容認する以外なかった。

カレンは、母親のことを思った。しかし、それは考えても仕方のないこと。囲いの鳥と変わらぬ彼女には母親の生活の心配をするだけの力は無かった。カレンが、生まれてすぐに死んだという父親はどんな人間だったのだろうか。国王に拝謁を許された偉大なる冒険者、それが父について聞かされてきた知識の全てだった。なんで死んだのかも教えてはもらえなかった。やはり、冒険の途中で魔物との戦いに敗れ殺されたのだろうか。十八年前というと、魔王アーサーの勢力の最も盛んだった時期にあたる。魔王と戦って死んだのかもしれない。そう考えると、決って、カレンの冒険者としての血が騒ぐのを感じるのだ。その魔王アーサーが復活しようとしているという。本当の話だろうか。彼女には、復活という言葉は馴染みのないものだ。一度死んだ人間が生き返るなんてこと、現実には有り得るのだろうか。

毎夜、ガランカは、なにかしら珍しい品物を持って、カレンの寝室を訪問した。ある夜、彼は白い小さな玉を連ねた首飾りを持ってきた。海に住む貝から採れる真珠という宝石だと言った。カレンも、真珠という名は聞いたことがある。とてつもなく高価な物だと聞いている。海というものがあるらしいことも知っている。ただ、見たことがない。生き物である貝から宝石が採れるというのも奇妙な話だと思った。

夜毎の話は次第に長くなる。ガランカは、カレンの知らない知識をいっぱい持っている。特に海について。彼は、王室の用事で何度かエルドールに行ったことがあるのだ。風の力で動く巨大な外洋船。わずか一日のうちに周期的に海の水が増えたり減ったりするという潮の満ち引き。白い砂で出来た台地に波が押し寄せ、その水は塩辛いそうだ。話は尽きることなく、いつの間にか蠟燭が燃え尽き淡い月明かりのみとなった室内には、絹の天幕の中、ふたつの人影だけが残った。その影が時折ひとつに重なって見えるのは気紛れな月明かりの悪戯だろうか。

エドガー・ハートンは、外出用のコートを脱ぎ、壁の釘にそれをぶら下げた。壁にはいたるところに茶色のくすんだしみが浮きだしている。ところどころ曲がった木の柱。はみ出した漆喰。小さな村の安宿の一室だ。

「ここは、ぼくの部屋だ」

彼は、そう言った。その声は変声期前の少年の声に近い。だが、何か底知れぬ威圧感がある。

「眠れないんだ」

ルーイは、机から顔を上げた。蝋燭の光の中に少年の金髪が揺れる。

「きみが眠れないのは、きみの勝手だ。でも、ぼくの机が占領されているのは、ぼくが困る。」
「不機嫌だね」

「おたがいさま」

「あの子、どうしてるんだろう？」

ルーイは、窓の外を眺めながら、そう独り言のようにつぶやいた。夜も更け、村の家々の灯はすでに消えている。

「だれ？」

「この間、洞窟の中で拾った子」

ルーイは、再び机にうつ伏した。

「ふさぎ込んでるのは、そのためか」

エドガーは、ルーイの頬にかかる髪をかき上げた。数週間前彼らが洞窟で救った女の子は、カトマール



の城下の宿から消息を絶ったのだと聞いている。

「名前もきいてなかったんだ」

ルイーは、机にうつ伏したままエドガーを見た。

「カレンだ。カレンⅡダルク」

「どうして知ってるの！」

ルイーは、跳ね起きた。

「ちよつと調べれば分かることさ」

「居場所も知ってたんだね！」

ルイーは、エドガーに詰め寄った。

「そこまでは知らない。残念ながら行方不明だ」

その時、音もなく部屋の窓が開き、一人の男が現れた。黒ずくめのその独特なデザインの衣装は、ニンジャだ。夜の闇や、洞窟の暗闇の中に潜み、専ら情報収拾を本業とする。その一方、闇の中で
の戦いのエキスパートでもある。彼らは、人目につくことを極度に嫌う。

「エドガー殿」

ニンジャは、蝋燭の光の届かない部屋の隅で身を屈めた。声のトーンからして成人した男である
ことは確かだ。

「サスケか。城の様子はどうか？ ブルーノは？」

「ブルーノ殿は、エドガー殿の登城を心待ちにしている様子」

「ぼくは、今、忙しいところではないよ。勝手に待たせとけばいい。それで、カルハンの雫のありかは、つかめたかい？」

「それが、ブルーノ殿が肌身離さず持っているらしいのです」

「ブルーノが……。そいつは妙だ。ぼくは、またガランカあたりが守っているものと思っていたが」
気になる魔王の動き、気になる狂王ブルーノ、気になるカルハンの雫。あのアミュレットには特殊な力が秘められている。暗黒の魔力と共鳴する器だ。普通の人間が常時身に着けていられるようなものではない。そもそも、ブルーノは何故ぼくをエルドールから呼び寄せたのだ。エドガーは、思案顔に歩きまわった。この国に巧妙に張り巡らされた目に見えない罠を仕組んだのはアーサーなのか、ブルーノなのか、それとも別の何者か。そして、その罠のひとつにダルクの娘が掛かったのは、何者かの作為か、運命の悪戯と呼ばれる単なる偶然か。いずれにせよ、なかなか面白い事になりそうだ。エドガーは、立ち止まり唇の端に冷たい笑いを浮かべた。

「分かった、今夜はもう休んでおくれ」

エドガーがそう言った時には、もう、ニンジャの姿は消えていた。

ニコラトザールは、ルーン山脈の東に連なる丘陵地と平野部からなる。王都カトマールはタケル川の川沿いに位置し、西にルーン山脈、北にサルテラ山塊の頂を望む絶景の地として知られている。

国王ブルーノ・コルテリアスは、名君ではなかったが、暴君と呼ばれるほどではない。半ば狂ってはいたが、その狂気はもっぱら国外に向けられ、国の中に向けられることはなかった。領主として適度な狂気と言えるものであった。したがって、領民にとっては是も非もないごく妥当な国王であったと言えよう。

ガランカとカレンの結婚式は、国王ブルーノも参列する盛大なものになった。カレンがガランカの屋敷に来て、数カ月、季節は春から夏になっていた。王宮での大立ち回りとは国王への口約束もあるし、そろそろ式をあげようか。それが、ガランカのプロポーズの言葉だった。カレンは、ただこっくりとうなづいて、微かに丸みをおびてきた自分のお腹に視線を這わせた。白いドレスに身を包んだカレンは、王都の中に張り巡らされた水路に浮かべた小船にガランカと並んで座り、往来の人々からの祝福の花束を受けた。美しい季節、タケル川から引き込む水の色、鮮やかな陽の光、着飾った人々のざわめきと時折沸き起こる歓声。カトマールは、美しい都だった。

月明かりの中、時折風が木の枝を揺らす以外は動く物とてない静かな森が広がっている。サラテラ山塊の主峰カンナ山の中腹、人里離れた山奥、沼のように息を潜めた木立の中に埋もれた屋根があった。その屋根の下、粗末な僧服を着た短い黒髪の男が板敷きの床に膝をついていた。彼の視線の先には頭の禿げ上がった恰幅の良い老人が胡坐を組んで座っている。広い室内は数多くの蝋燭の灯りで照らし出され、その奥には、金色に輝く人物像が、数体、揺らめくように立っている。

る。

「老師、吸血鬼たちが動き出しました」

黒髪の男が言った。

「うむ。そのようじゃな。問題は、今回の事態どう見るかじゃ。いずれ我らの態度も決めねばならぬ時がこよう。おぬしならどう出る？」

老人は、腹の底から響くような低い声で、男に問いかけた。

「まだ彼らの真意を図りかねております」

「それはいつものことよ。数万年の歳月と共に人として存在する術を失った者たちだ。我ら凡人には解せぬのも無理はあるまい。しばらくは成り行きに任せるしかなさそうじゃな。ただし、監視は怠るまいぞ。特にあの破壊神エドガーからは目を離すでない」

試し読みをお読み頂きありがとうございます！

「しなやかな残響―春を紡ぐ者の叙事詩―」全3巻

失われた古代文明。不死の一族。交差する少女たちの運命。美しい文章で綴る 24 万文字の壮大な物語。Kindle 書籍で好評販売中です。
全巻、Kindle Unlimited で無料購読可能

しなやかな残響 第1巻：カトマール王都落城 編

(Kindle 版：250 円)

<https://amzn.asia/d/01Yx6x06>

しなやかな残響 第2巻：エルドールの鬼神編 編

(Kindle 版：450 円)

<https://amzn.asia/d/0gCfhi3H>

しなやかな残響 第3巻：自らの血で時を紡ぐ者 編

(Kindle 版：450 円)

<https://amzn.asia/d/0eug1CTe>

ホームページで、登場人物紹介・相関図、挿絵ギャラリー、考察など、随時更新中。

<https://studio-hirop.com/>

1～3全巻まとめた総集編

<https://amzn.asia/d/0cCeAe80>

ペーパーバック版

<https://amzn.asia/d/00ft9XQa>

サンプル版